

平成30年度

# 学校改善支援プラン

## I 平成29年度全国学力・学習状況調査の結果分析

- ◆ 1 全体的な分析
- ◆ 2 各教科の分析

平成29年度の全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果と、その質問項目における初出の年度の結果とを経年比較することで、この10年間の授業改善等の取組の成果をまとめています。

## II 学校が組織的に進める授業改善の充実に向けて

～探究型授業に関する質問項目の分析と  
学校の特色ある取組～

## III 検証改善委員からの提言

委員長に阿部昇氏（秋田大学大学院教育学研究科教授）、外部委員に田村学氏（國學院大學人間開発学部教授）を迎え、秋田の探究型の授業づくりを視点とした改善の方向性を提案しています。

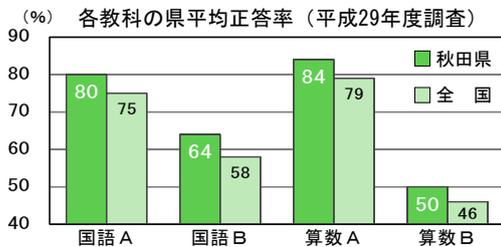
# I 平成29年度全国学力・学習状況調査の結果分析

## 1 全体的な分析

### 【教科に関する調査の結果】

- 各教科の平均正答率は、全国平均を3ポイント以上上回っており、良好な状況であるといえます。
- 小・中学校ともに、ほぼ全て（小：98.0%，中：94.7%）の問題において、平均正答率は全国平均を上回っています。
- 無解答率は、小・中学校ともに、国語、算数・数学の全ての問題で全国平均を下回っています。

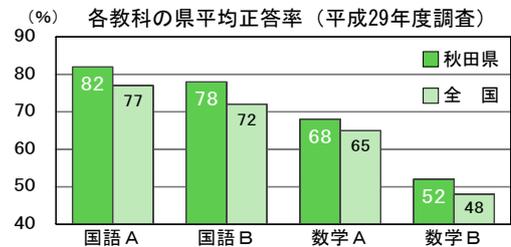
#### 小学校6年生



県平均正答率の3年間の推移

年度	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	理科
H29	80 (+5)	64 (+6)	84 (+5)	50 (+4)	
H28	77 (+4)	64 (+6)	82 (+4)	52 (+5)	
H27	76.0 (+6.0)	76.4 (+11.0)	81.2 (+6.0)	51.5 (+6.5)	66.7 (+5.9)

#### 中学校3年生



県平均正答率の3年間の推移

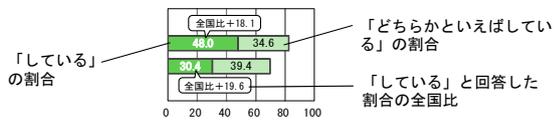
年度	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	理科
H29	82 (+5)	78 (+6)	68 (+3)	52 (+4)	
H28	79 (+3)	72 (+5)	67 (+5)	48 (+4)	
H27	80.8 (+5.0)	70.7 (+4.9)	68.4 (+4.0)	46.9 (+5.3)	59.6 (+6.6)

※( ) 内の数値は全国平均正答率との比較を表しています。  
※平成28年度以降の平均正答率は、文部科学省から整数で公表されています。

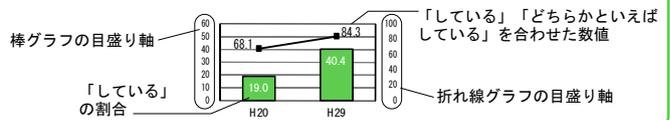
### 【児童生徒質問紙調査の結果】

**グラフの見方** これ以降に示すグラフは、「■ している」「□ どちらかといえばしている」等、肯定的な回答の割合（%）に基づき作成

**全国との比較** : 「している」と回答した割合に対する秋田と全国との比較



**初出の年度との比較** : 当該質問項目が初めて出された年度の調査結果との比較

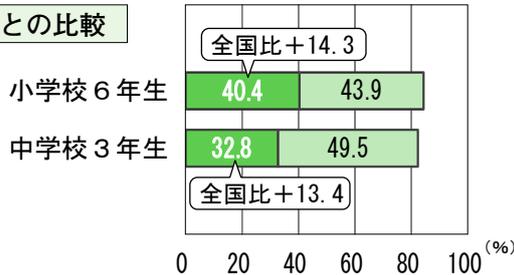


#### (1) 国語、算数・数学に関する意識について

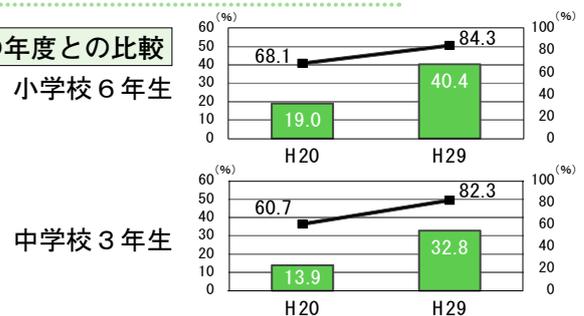
- 次の質問項目に対する肯定的な回答の割合は、当該質問項目の初出の年度に比べて大きく上昇しています。特に、「している」と回答した割合がより大きく上昇しており、授業改善が着実に進められてきたことがうかがえます。

#### 「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか」

##### 全国との比較

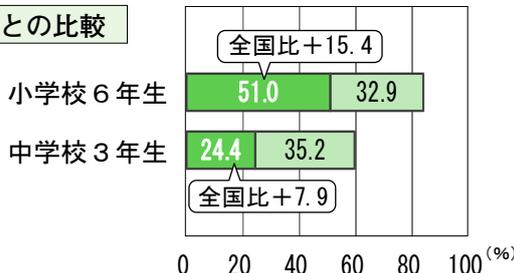


##### 初出の年度との比較

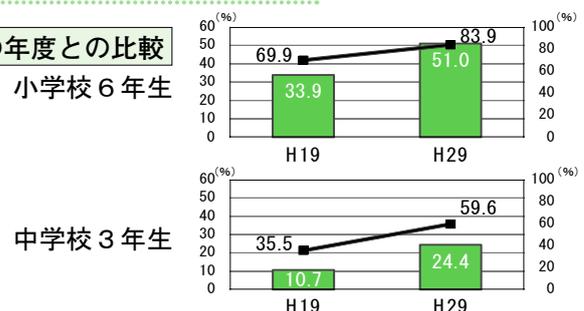


#### 「算数・数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」

##### 全国との比較



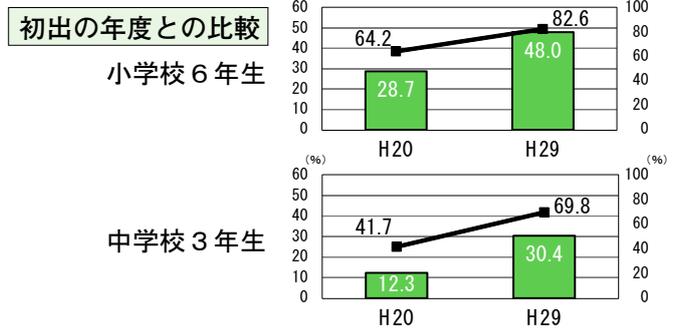
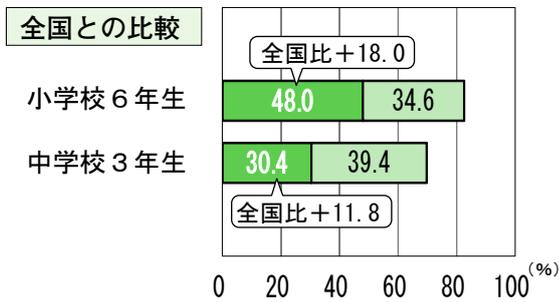
##### 初出の年度との比較



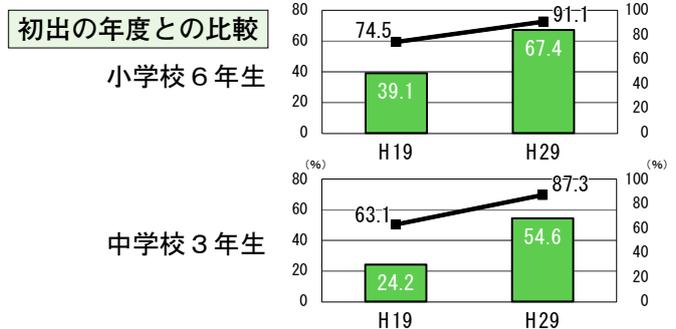
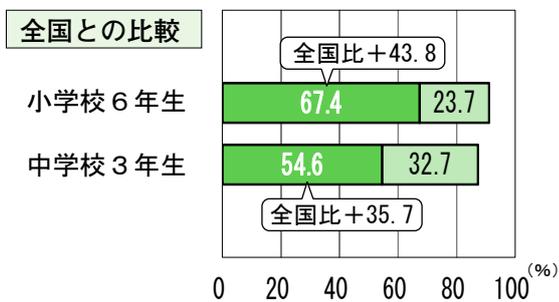
## (2) 家庭での学習習慣に関する意識について

○次の質問項目に対する肯定的な回答の割合は、当該質問項目の初出の年度に比べて大きく上昇しています。このことから、各学校が家庭学習の指導を意図的・計画的に進めてきたことで、児童生徒が自分で計画を立てて学習に取り組むようになってきたことがうかがえます。

### 「家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか」



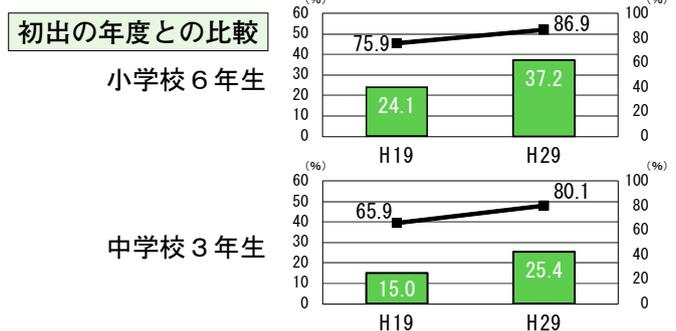
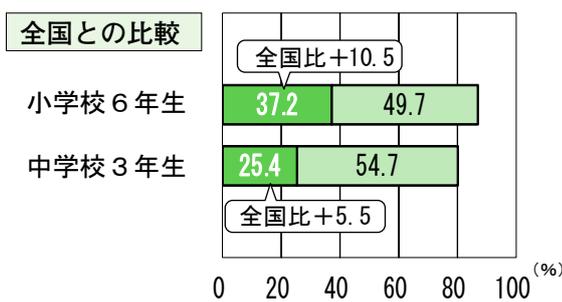
### 「家で、学校の授業の復習をしていますか」



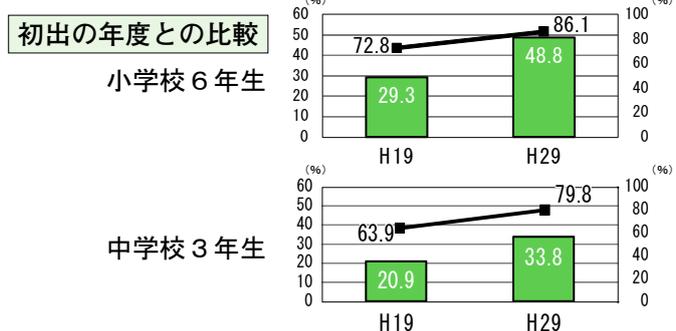
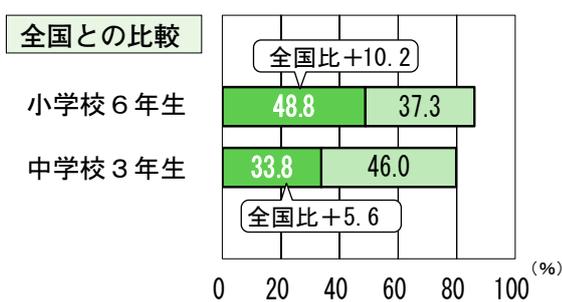
## (3) 豊かな人間性の育成に関する意識について

○次の質問項目に対する肯定的な回答の割合は、当該質問項目の初出の年度に比べて大きく上昇しています。児童生徒は、学校の様々な教育活動に主体的に取り組み、そこでの成功体験等を通して、自己肯定感を高めている様子がうかがえます。

### 「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか」



### 「自分には、よいところがあると思いますか」





- 平均正答率は、小学校では4ポイント以上、中学校では3ポイント以上、全国平均を上回っている。
- 学校質問紙において、「算数・数学の指導として、実生活における事象との関連を図った授業を行った」に対する肯定的な回答の割合は、小学校では9ポイント以上、中学校では16ポイント以上、全国平均を上回っている。

【小学校算数B3(2)】

**出題の趣旨** 仮の平均を用いた考えを解釈し、示された数値を基準とした場合の平均の求め方を、言葉や式を用いて記述できる。  
 平均正答率 県 26.5% (全国 26.1%)

かずやさんは、平均を求める計算を簡単にするために、7mをこえた部分に着目し、次のように平均を求めました。

【かずやさんの平均の求め方】

7mをこえた部分の平均を求めます。  
 $(52 + 31 + 54 + 20 + 43) \div 5 = 40$   
 7mに、求めた平均の40cmをたします。  
 車が進んだきよりの平均は、7m40cmです。

【かずやさんの平均の求め方】を聞いたはるなさんは、次のように考えました。



7mのかわりに、7m20cmをこえた部分に着目しても、平均を求めることができます。

(2) 7m20cmをこえた部分に着目した平均の求め方を、言葉や式を使って書きましょう。

授業改善のポイント

＜予想されるつまずき＞

- 7m20cmをこえた部分の平均のみを記述し、 $(32 + 11 + 34 + 0 + 23) \div 5 = 20$  20cmとした。
- 7m20cmをこえた部分に0があるが、平均を求める際に「 $\div 4$ 」と計算し、7m25cmとした。

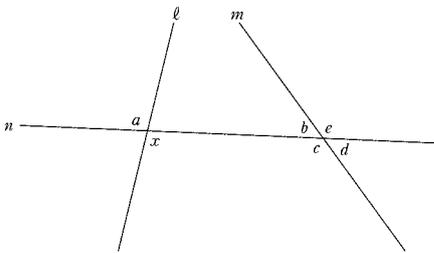
＜授業改善の視点＞

- ①平均がおよそどのくらいになるかを見積もり、問題解決した結果を振り返るようにする。  
 発問例「求める平均はどれくらいになりそうですか。」
- ②いくつかの測定値の平均を求めているかについて着目できるようにする。  
 発問例「かずやさんは5で割っているけれど、なぜ5で割ったのでしょうか。」

【中学校数学A6(1)】

**出題の趣旨** 錯角の意味を理解している。  
 平均正答率 県 37.6% (全国 43.1%)

(1) 次の図で、2つの直線  $l$ 、 $m$  に1つの直線  $n$  が交わっています。このとき、 $\angle x$  の錯角について、下のAからEまでのの中から正しいものを1つ選びなさい。



- ア  $\angle x$  の錯角は、 $\angle a$  である。
- イ  $\angle x$  の錯角は、 $\angle b$  である。
- ウ  $\angle x$  の錯角は、 $\angle c$  である。
- エ  $\angle x$  の錯角は、 $\angle d$  である。
- オ  $\angle x$  の錯角は、 $\angle e$  である。
- カ  $\angle x$  の錯角は、 $\angle a$  から  $\angle e$  までの中にはない。

授業改善のポイント

＜予想されるつまずき＞

- 同位角や錯角は平行な2直線に1直線が交わった場合のみに存在すると誤った理解をしている。
- 2直線の位置関係に関わらず、同位角や錯角は常に等しいと誤った理解をしている。

＜授業改善の視点＞

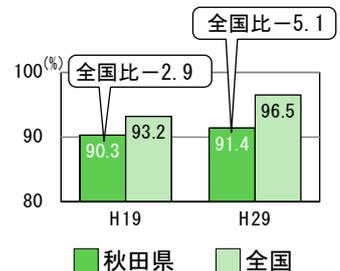
- ①平行な2直線と平行でない2直線について、それぞれの角の位置関係を捉える活動を取り入れる。  
 発問例「2直線の位置を変えました。この図にも $\angle x$  の同位角はありますか。」
- ②2直線が平行ならば、同位角や錯角は等しくなることを実感を伴って理解できるようにする。  
 発問例「錯角は常に等しいといえますか。」「錯角が等しくなるのはどんなときですか。」

TOPIC 学校質問紙調査(中学校)の経年比較から

右のグラフは、学校質問紙の質問項目「数学の指導として、計算問題などの反復練習をする授業を行いましたか」の調査結果について、肯定的な回答の割合を経年比較したものです。

基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題が見られる場合には、児童生徒の学びを深めたり主体性を引き出したりといった工夫を重ねながら、確実な習得を図ることが求められています。例えば数学の授業においては、一単位時間いっぱい反復練習を行うということではなく、「学習過程のどの場面に設定するか」「フラッシュカードを用いたり、時間を計ったりするなど、生徒が主体的に取り組むことができるような手立てをどうするか」「授業と関連させながら家庭学習の質の向上を図ることができないか」等について、指導の手立てを工夫する必要があります。

全国との差



## II 学校が組織的に進める授業改善の充実に向けて

本県の各学校では、「学習の見通しをもつ」「自分の考えをもつ」「ペア・グループ・学級で話し合う」「学習内容や学習方法を振り返る」といったプロセスを機能させた探究型授業が展開されており、これは、新学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善にもつながるものと捉えられます。

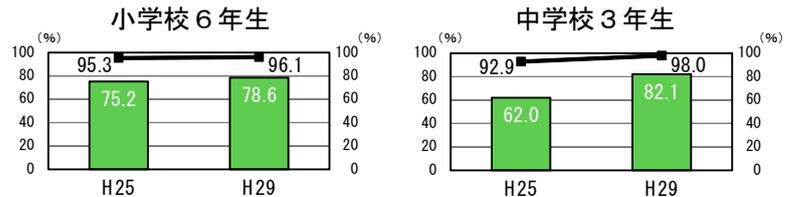
### 学習の見通しをもつ

#### 児童生徒質問紙調査

◇ 授業の中で**目標（めあて・ねらい）**が示されていたと思いますか。

#### 初出の年度との比較

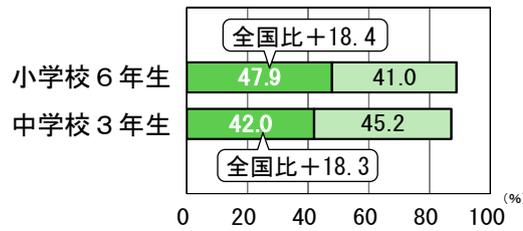
「当てはまる」と回答した割合は、小・中学校ともに高く、中学校では4年間で約20ポイント増加しています。児童生徒に何を学ぶかを理解させ取り組ませる工夫が進んでいることがうかがえます。



◇ 学級やグループの中で**自分たちで課題を立てて**、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか。

#### 全国との比較

「当てはまる」と回答した割合は、小・中学校ともに全国を約18ポイント上回っており、主体的に問題解決に取り組ませるための指導の充実が図られていることがうかがえます。



#### 「学習の見通しをもつ」段階における特色ある取組例

【A中学校】日常的に授業を見合い、目指す授業のイメージを共有しながら、「**生徒目線で考える学習課題の設定**」や「**学習の流れが分かる板書**」の工夫に取り組んでいます。

#### <生徒目線で考える学習課題の設定のポイント>

- ・どのような表現で学習課題を提示すれば生徒にとって必要感のあるものになるかをイメージする。
- ・学習課題から授業のゴールを意識させる。
- ・授業のゴールに行き着くための見通しをもたせる。

#### 【学習課題の例：社会科】

- △「みんなでいろいろな歳出について考えよう」
- 「もしも市長だったら歳出をどのように改善するか？」  
(歳出について考えたいという生徒の意欲を引き出すために、具体的な場面を想定させる。)

#### <学習の流れが分かる板書の工夫>

参考になる板書写真に研究主任がコメントを入れて紹介することで、板書のよさや工夫点を共有し、授業改善に生かしています。



○A中学校では、空き時間を利用して校内を一巡しながら授業等を日常的に見合う「生徒を見合う会」を実施しています。その際、「生徒にとって必要感のある学習課題になっているか」「学習の流れが分かる板書になっているか」等の共通実践を、生徒の学ぶ様子から検証し、改善を加えています。また、生徒の表情や板書等を写真で記録し、職員室内に掲示するなどの工夫により、全職員で共有できるようにしています。

#### 「学習の見通しをもつ」段階における教師の支援のポイント

- ◎「**児童生徒の課題意識を高めながら学習課題（めあて等）を設定すること**」が大切です。学習課題の設定の場面では、児童生徒と共につくり上げる場合や児童生徒が話し合いながら見だしていく場合などがありますが、状況に応じて様々な教師の関わり方が考えられます。その際には、児童生徒の気付きや疑問等をどのように引き出すかを考えるとともに、課題意識が高まっているかどうかを教師が見取ることが必要です。
- ◎「**何について、どのようにして考えていけばよいのかを明らかにすること**」が大切です。既習内容との関連に目を向けさせたり、見通しにつながるキーワードを発言させたりしながら、児童生徒の表情や発言等から個々の見通しを捉えつつ学級全体の状況を把握し、次の活動につなげることが重要です。

## ～ 探究型授業に関する質問項目の分析と学校の特色ある取組 ～

探究型授業の充実を図るためには、形式的にプロセスをなぞるのではなく、**各段階をしっかりと機能させた上で、一連のプロセスとして関連付けて捉えることが重要です。**

今年度の「学校改善支援プラン」では、探究型授業に関する質問項目について初出の年度と比較しながら、各段階における特色ある取組例や支援のポイントを紹介しています。

### 自分の考えをもつ

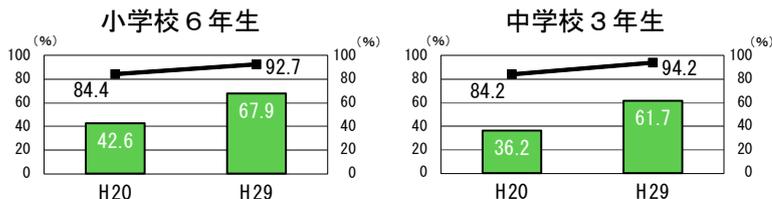
#### 児童生徒質問紙調査



◇ **自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか。**

#### 初出の年度との比較

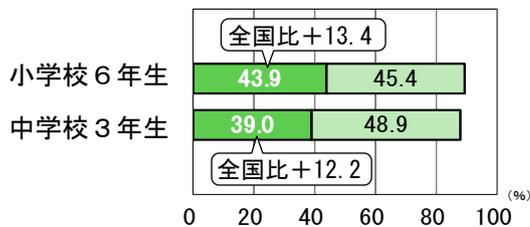
「当てはまる」と回答した割合は、小・中学校ともに、9年間で約25ポイント増加しており、児童生徒の発言を生かした授業が展開されていることがうかがえます。



◇ **先生から示される課題や、学級やグループの中で、自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思いますか。**

#### 全国との比較

「当てはまる」と回答した割合は、小・中学校ともに全国を約12ポイント上回っています。また、そのように回答した児童生徒の方が、各教科の平均正答率が高い傾向が見られます。



#### 「自分の考えをもつ」段階における特色ある取組例

【B小学校】「児童一人一人が考えをもつ、考えを伝える授業づくり」に取り組むために、「**学び合いのための学習姿勢づくり**」を活用し、児童の実態に応じた指導をしています。

#### 「学び合いのための学習姿勢づくり」の活用

- ・月ごとに、目指す児童の姿を全職員で共通理解する。
- ・児童の実態を基に、低・中・高学年ごとの具体的な取組を決定し、共通実践する。
- ・児童の姿から取組を検証する。

#### 学び合いのための学習姿勢づくり

#### 自分の考えをしっかりともう。

※一部抜粋

1, 2年	3, 4年	5, 6年
<b>活発な話し合いが成立するためには、その前段階（自力解決）の個の学びが確立されていることが前提になります。</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>◆一斉指導やスモールステップ（一問一答）の自力解決から、段階的に見通しをもって自力解決する時間を増やしていく。</li> <li>◆「できた」「わかった」ときでも、すぐハイハイと言わず、自分の思いを話し合いに生かすための約束を定着させていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆単位時間の中に、個の学びの時間（考える段階）をある程度パターン化して位置付ける。</li> <li>◆「できた」「できなかった」に関わらず、最後まで自分の力で頑張り抜こうとする学びの姿を、単位時間の中で積み重ねることができたかどうかを意識させるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆読み取った内容を、自分の考えの根拠として発表につなげることができるようにする。</li> <li>◆一つの考えで完結しないで、多様な考えで追究しようとする姿勢で自力解決に取り組むことができるようにする。【考えの広がり】</li> </ul>

○B小学校では、自分の考えをもつ場面において、**自力解決の時間は必ずしも問題を解決済みにする時間ではない**という共通理解の下、「分からない」「途中まで」「新たな疑問」を認め、学級全体の状況に応じて、考えをもつ時間を適宜設定しています。また、**目指す授業のイメージを全職員で共有**するために、共通実践事項を意識した提示授業を、年度の早い時期に研究主任が行っています。

#### 「自分の考えをもつ」段階における教師の支援のポイント

◎「**机間指導による見取りを基にして、次の学習活動に生かすこと**」が大切です。机間指導における教師の支援が児童生徒にとって本当に必要なものになっているかを見極めつつ働き掛けるとともに、児童生徒が「どこでつまづいているのか」「どのような考えをもっているのか」等を見取り、次の学習活動に生かすことが必要です。また、見取りを通して、例えば「最初に指名する児童生徒」「核心場面で指名する児童生徒」「考えを深める場面で指名する児童生徒」等を決めるなど、話し合いのどのタイミングで意図的に指名するかを構想しながら机間指導することも重要です。

# ペア・グループ・学級で話し合う

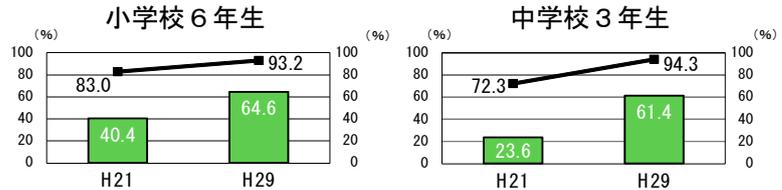


## 児童生徒質問紙調査

◇ 学級の友達（生徒）との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか。

### 初出の年度との比較

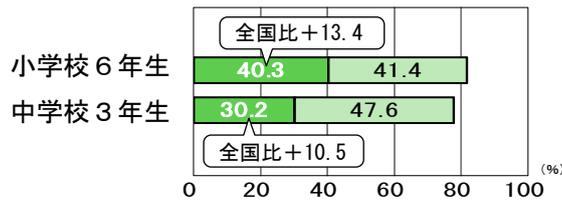
「当てはまる」と回答した割合は、8年間で、小学校が約24ポイント、中学校が約38ポイント増加しており、探究型授業に関わる質問項目の中で、数値の伸びが最も大きくなっています。



◇ 学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。

### 全国との比較

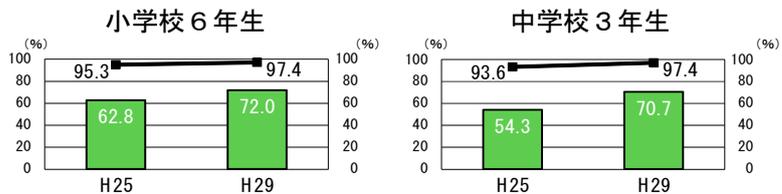
「当てはまる」と回答した割合の小・中学校の差は約10ポイントで、他の質問項目に比べて校種間の差があるといえます。



◇ 友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか。

### 初出の年度との比較

肯定的な回答の割合は、小・中学校ともに少しずつ増加しており、特に、中学校の「当てはまる」と回答した割合は約16ポイント増加しています。

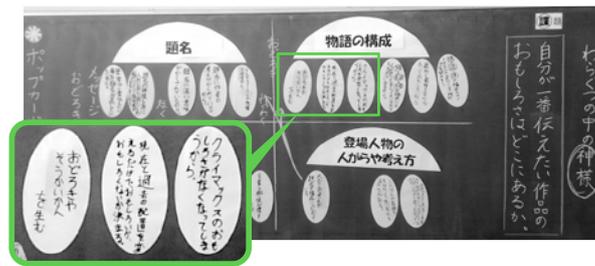


## 「ペア・グループ・学級で話し合う」段階における特色ある取組例

【C小学校】 活用の目的に応じた思考ツールを用い、児童の考えを可視化して整理することで、「何のための話し合いなのか」を明らかにする工夫をしています。

- ・思考ツールは、授業のねらいや児童の実態に応じて効果的なものを用いる。
- ・思考ツールの活用の工夫について、週一回の校内研修日で紹介し、学校全体で共有しながら実践を積み重ねる。

(例) 5年国語科における思考ツール(クラゲチャート)の活用



<思考ツールと活用の目的>

- ・ベン図 → 【比較する】
- ・ピラミッドチャート → 【構造化する】
- ・コンセプトマップ → 【関係付ける】
- ・クラゲチャート → 【根拠、理由、原因を探す】
- ・イメージマップ → 【考えを広げる】

【D中学校】 他者との交流を通して自分の考えを広げたり深めたりするために、生徒同士の話し合いの質を高める工夫をしています。

<生徒同士の話し合いの質を高めるための視点>

- ・生徒が必要感をもって話し合える場になっているか。
- ・実態に応じた学習形態や時間を工夫することで、一人一人が考えを表現できるようになっているか。
- ・「なぜ」「分からない」「なるほど」といった生徒同士の会話を取り上げて授業を展開できているか。
- ・安心して間違いを伝え合える雰囲気になっているか。



数学における話し合いの様子

<生徒同士が関わりながら学ぶための工夫>

- ・教師の指示や発問の吟味
- ・生徒同士で問題を解決する時間の保障
- ・学習リーダーの活用
- ・机間指導での的確な助言
- ・授業で生徒指導の機能を生かすという視点

# 学習内容や学習方法を振り返る

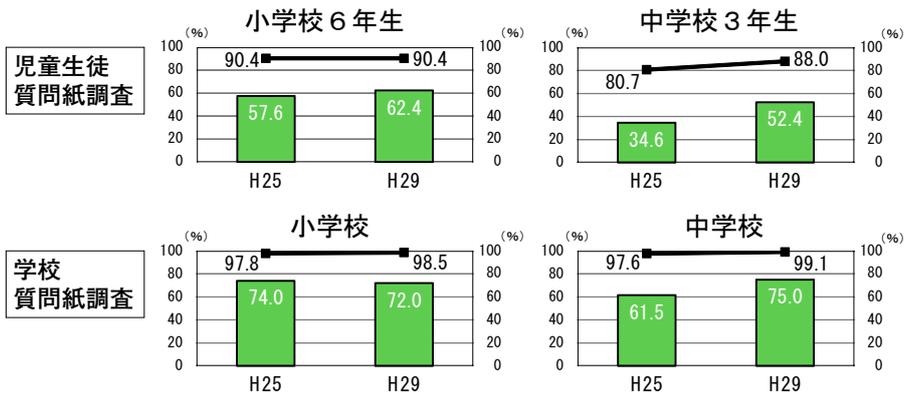


## 児童生徒質問紙調査

◇ 授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか。

### 初出の年度との比較

「当てはまる」と回答した割合が、中学校では4年間で、生徒質問紙調査においては約18ポイント、学校質問紙調査においては約14ポイント増加しています。小・中学校ともに、振り返る活動を授業に意図的に取り入れようとしていることがうかがえます。



## 「学習内容や学習方法を振り返る」段階における特色ある取組例

【E中学校】主体的に課題解決を図ろうとする意欲をもたせるために、振り返りカードの内容を工夫し、生徒の疑問や思いを生かして次時の学習課題を設定しています。

- 生徒が振り返りの視点を明確にもつことができるようにする。  
【振り返りの視点 (例)】
  - ◆今日の学習を通して考えた新たな疑問
  - ◆今日学んだ内容の中で、日常生活に生かせそうなこと
  - ◆次の時間に更に学習を深めたいこと、もっと知りたいこと
- 各教科に共通する視点を設定し、生徒が主体的に取り組めるような学習課題づくりに生かすようにする。

(例) 1年社会科の振り返りカード

月日	学習課題	授業のよめ	①課題の生活とのつながり ②授業前後の自分の変化 ③疑問 (この中から一つ選んで書きましょう。)
9月1日	ロボットは、 どうやって動くの？	ロボットは、 どうやって動くの？ ロボットは、 どうやって動くの？	1) ロボットの仕組み、 どうやって動くの？ 2) ロボットの仕組み、 どうやって動くの？
	1) ロボットの仕組み、 どうやって動くの？	ロボットは、 どうやって動くの？	ロボットは、 どうやって動くの？

○E中学校では、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、振り返る活動を必要な場面に設定しています。さらに、生徒に振り返りの視点を選択させて振り返りカードを書かせたり、学習課題の設定の場面で前時の振り返りを発表させたりするなど、振り返りの方法や生かし方を工夫しています。

## 「学習内容や学習方法を振り返る」段階における教師の支援のポイント

◎「本時の学びと自身の変容を自覚できるようにすること」が大切です。児童生徒自身に自覚させるためには、これまでの学びと関連付けるとともに、「どのように変容したのか」「どの場面で変容したのか」「変容の要因は何か」等の視点を示しながら、児童生徒の振り返りの内容を教師が価値付けることが重要です。また、学びの過程や結果を次の学習に生かしたり、新たな問いを見いだしたりすることができるような支援の工夫も必要です。

○C小学校やD中学校では、「何のための話し合いなのか」「何のためにペアやグループの活動を取り入れるのか」を明らかにした上で、授業改善に取り組んでいます。また、共に考えをつくり上げることを意識させ、児童生徒が関わり合いながら学びを深められるよう、思考ツールを取り入れたり指示や発問を吟味したりすることで、話し合いの質を高めています。

## 「ペア・グループ・学級で話し合う」段階における教師の支援のポイント

- ◎「児童生徒の考えをつなぎながら、学びを深めること」が大切です。学級で話し合う場面では、児童生徒の発表内容に丁寧に耳を傾けるとともに、発表に対して教師がすぐに納得するのではなく、発表を聴いている児童生徒のつぶやきや様子に目を向け、話し合いに巻き込むことが必要です。その際、話し合いの内容に応じて、論点を整理したり、一面的な考えをゆさぶる発問をしたりすることなどが重要です。
- ◎「主体的に話し合い、自分や集団の考えを広げ深められるようにすること」が大切です。主体的に話し合うためには、話し合う必然性が重要です。また、話し合う目的を児童生徒に理解させるとともに、「互いの考えを聴き合うこと」「考えを比べたり修正したりしながら、自分で考えること」「他者の考えをつなげて自分の考えを発展させること」ができるよう、全ての教科等で継続して取り組むことが必要です。
- ◎「目的に応じて話し合いの形態を工夫すること」が大切です。話し合いの形態をペア、グループ、学級の順と固定化せず、「自分の考えをもつ」段階の活動の目的と児童生徒の状況に応じて、例えば、個の考えを基に学級で話し合い、視点を共有化した後にグループで話し合うなど、柔軟に対応することも考えられます。

## 教科の壁を超えた共同研究の取組

【F小学校・G中学校】全ての教科等を通して育てたい資質・能力を基に研究の重点を設定し、共通実践するとともに、児童生徒の姿から授業を検証しています。

### G中学校 研究の重点の設定の工夫

「ゆさぶり」の工夫を切り口とした、教科の壁を超えた視点での授業づくり

- ・「ゆさぶり」を「生徒の思考に新たな視点を投げかけ、授業の流れに変化をもたらす、緊張関係をつくりだす教師のしかけ」と定義し、授業づくりに生かす。
  - ◆どの場面でゆさぶるのか。（導入、課題提示、学び合い、終末等）
  - ◆何のためにゆさぶるのか。（ゆさぶりの類型）
  - ◆どのようにしてゆさぶるのか。（課題、発問、資料、他者の意見等）

#### <ゆさぶりの類型>

- A 比較・検討を促す。 H よさや心を動かす活動を設定する。
- B 根拠を考えさせる。 I 身近なものや内容に興味をもたせる。
- C 別の見方や考え方を引き出す。
- D 好奇心を刺激する。
- E 難しさや意外性のある問題や課題を提示する。
- F 意図的に「ズレ」を生じさせる。
- G 意図的に「不足」や「欠落」を生じさせる。

### F小学校 児童生徒の姿からの授業改善の工夫

#### カリキュラム・デザインの作成と活用

- ・年度当初に作成したカリキュラム・デザインを基に、学年ごとや低・中・高学年ごとに、関連する資質・能力の内容を線でつないでその意味を共有したり、教科等間で共通する学びのキーワードを書き入れたりするなど、各教科等の特質や系統性を踏まえつつ**教育活動全体を俯瞰して授業づくり**を行う。
- ・カリキュラム・デザインを年度途中で見直し、児童の実態に応じたものに改善していく。
- ・授業研究会では、**学習指導案に「育てたい資質・能力」を明記し**、授業のねらいの達成に加え、資質・能力の育ちについても話し合うことで、教師の手立てのみに着目するのではなく、児童生徒の姿を捉えて授業改善を図る。

(例) カリキュラム・デザインの形式

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
算数							
社会							
理科							
総合的な学習の時間							
特別活動							
道徳							
音楽							
図工							
体育							

単元間や教科等間などのつながりを記録していく。

## 日常的に授業改善を図るための取組

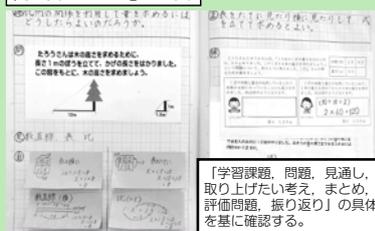
【H小学校】教育専門監の優れた実践を共有しながら、様々な取組を「つなげて生かす」という視点で捉え直し、日々の授業の質の向上を目指しています。

### ① 全校体制で授業改善を図るための工夫

- ・研修会等での指導助言などを基に取り組むべきことを明らかにし、日々の授業で実践する。
- ・諸調査や単元評価問題の結果分析から明らかになった**学習状況の課題等**を基に、日々の授業を見直す。

### ② 教育専門監との連携による授業の質の向上

#### 「板書ノート」の例



「学習課題、問題、見通し、取り上げたい考え、まとめ、評価問題、振り返り」の具体を基に確認する。

- ・教育専門監が作成している毎時間の「板書ノート」を活用し、要点を押さえた授業の打合せを短時間で行う。また、授業後には「**授業改善のための観点シート**」（県教委作成）を活用して検証する。
- ・児童に自分たちの学び方等の改善点を話し合わせ、次の授業に生かせるように励まし、目指す授業を意識させながら、児童と共に**授業改善**を図る。

## 全校で「目指す授業のイメージ」を共有するための取組

【I中学校】生徒自身が「目指す授業の姿」を意識し、「主体的に学ぶ姿」についての**共通のイメージ**をもてるよう、**全校授業づくりガイダンス**を実施しています。

- ・企画・運営は学習委員会が担当し、学期ごとに実施。事前にガイダンスの内容に応じたアンケートや学級ごとの話し合いを行い、一人一人に考えをもたせる。

#### 【全校授業づくりガイダンスの例】「生徒でつくる『つながる授業』」

- |                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| ① 授業に関するインタビュービデオ視聴（5分） | ⑤ 2・3年生の授業DVD視聴（10分） |
| ② 授業に関する全校Q&A（5分）       | ⑥ パネルディスカッション（30分）   |
| ③ ガイダンス開催の目的確認、問題提起（3分） | ⑦ 振り返りシート記入（5分）      |
| ④ コーディネーター、パネリストの紹介（2分） | ⑧ 感想発表（5分）           |

- ・ガイダンス後に、各学級で具体的に**取り組むこと**を話し合い、実践する。



### III 検証改善委員からの提言

秋田県検証改善委員会委員長 秋田大学大学院教育学研究科教授 阿部 昇

#### ◆ 秋田県の「探究型授業」は「主体的・対話的で深い学び」の先進的な典型例

今年度も全国学力・学習状況調査で、秋田県の子どもたちは全国トップレベルの成果を残してくれました。無解答率の低さも例年どおりトップレベルです。秋田県の先生方の授業力の高さがその第一の要因であることは、間違いありません。特に子どもの主体性を重視し、対話を軸としながら深い学びを生み出していく「探究型授業」を展開する授業力です。

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が前面に出され、「見方・考え方」、知識相互の「関連付け」、情報の「精査」、「問題を見だして解決策」を考える過程などが重視されています。これらは秋田県では、探究型授業を通じて既にかなり実践されています。秋田県の子どもがB問題に強く、無解答率が低いのは、それによると考えられます。

「主体的・対話的で深い学び」には多様な学習の在り方が含まれますが、秋田県の探究型授業は、その先進的な典型例の一つです。国内はもちろん、海外の先進的な授業と比べてもトップレベルと言えます。

#### ◆ 「対話」の学習効果と「深い学び」をより強く意識する必要があります

今回は10回目の調査となるので、これまでを振り返ってみました。「自分の考えを発表する機会がある」「友達との間で話し合う活動をよく行う」「資料を読み、考えを話したり書いたりする」等の質問に「当てはまる」と答える児童生徒の割合は、年々上がってきています。探究型授業に関わり先生方の指導が進展し、成果を上げていることが分かります。

とは言え、まだ改善の余地はあると思います。本当に一人一人の子どもたちが主体となる授業になっているか、対話のもつ多様な役割を十分生かしているか、どこまで深い学びが展開できているかを、再度問い直してほしいと思います。

「対話」については、それが何をねらった対話かを意識する必要があります。今は、考えを友だちに説明できることが大切、色々な見方を出し合うことが大切、違う見方を比べることが大切、試行錯誤する過程が大切、新しい見方を発見することが大切、違う見方をめぐり討論することが大切など、学習過程でその対話がどのような位置にあるのかを意識することが大切です。展開・拡張型の対話なのか集束・収斂型の対話なのかを意識するだけでも、指導に切れ味が生まれます。

「深い学び」については、その教材でその学習でどこまで到達させたいのか、どのように飛躍させたいのかを、教師が見通しておくことが必須です。曖昧な見通しでは「深い学び」は生まれてきません。そのためにも、何と言っても教材（学習対象）についての深く豊かなアプローチが必要です。深く豊かな教材研究があれば、目標・ねらいも、具体的ではっきりとしたものとなってきます。

私は教材研究の際に「①言語に徹底してこだわること／②構造的・文脈的に教材を見ること／③多面的・多角的に教材を見ること／④批判的・評価的に教材を見ること」を提案しています。どの教科でも教材の新しい側面が見えてくる瞬間には、知的興奮があります。教師自身が教材（学習対象）研究に知的興奮を感じられないレベルで授業に臨んでも、子どもたちに知的興奮を感じさせることは難しいと思います。各教科の「見方・考え方」も、そういった豊かで深い教材研究の過程で見えてくるものです。教師自身が「見方・考え方」をフル回転させないままでは、教材研究は深まっていけないはずだと。

#### ◆ 「教科の壁」「学年の壁」「学校の壁」を超えたより豊かな共同研究を

深く豊かな教材研究がないままに目標・ねらいが設定されたり、何のための対話かが曖昧なまま指導計画が立てられたりすると、探究型授業（主体的・対話的で深い学び）は、すぐに活動主義に陥ります。発言や活動が派手に展開されても、子どもたちの学びは薄いままという状態です。探究型授業では、教師のより高い力量が求められます。

秋田県で探究型授業が成果を挙げているのは、既に述べたとおり秋田県の先生方の授業力が高いからですが、それを支えているのは、秋田県の共同研究システムです。校内研修、小中連携・小小連携・中中連携研修、教育専門監研修、コア・ティーチャー研修、総合教育センターの研修、大学との共同研究など多様な研究が、実質的に機能しています。

これも、やはり国内的に見ても先進的であるだけでなく、海外と比べても先進的な研修・研究の在り方と言えます。とは言え、「教科の壁」が先生方の共同研究を押し止めている学校・地域もまだあるようです。「学年の壁」が超えられない場合もあるようです。小中連携等が研究を活性化させている地域がある一方で、形骸化してしまっている地域もあるようです。「教科の壁」「学年の壁」「校種の壁」を乗り越え、より豊かな共同研究を創り出してほしいと思います。

そのことに関わり、先生方の「多忙化の解消」が喫緊の課題です。質の高い探究型授業を行うためには、今述べた深く豊かな教材研究、対話を軸とした周到に準備された授業計画が重要です。そのためには授業準備の時間・共同研究の時間が必要です。しかし、部活動指導の負担、実務的な職務の増加などが先生方の時間を奪っています。教職員の加配、実務の大幅削減、部活動時間の短縮、部活動指導の外部委託などを進めていただきたいと思います。また、様々な行事等の精選・見直しも行っていただきたいと思います。

秋田県検証改善委員会委員 國學院大學人間開発学部教授 田村 学

「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。授業の主役は教師ではなく、一人一人の児童生徒。児童生徒が、持っている力を存分に発揮し、本気で取り組む授業を実現することが欠かせない。繰り返し、何度も何度も自分の持っている力を発揮し続けることが重要である。そのためにも、授業を「探究モード」に変革していくことが求められている。その意味では、秋田の取組は、今期改訂をリードするものである。

主体的な学びについては、授業の導入における「課題設定」の場面と終末における「振り返り」の場면을改善したい。児童生徒は、実生活や実社会とつながりのある具体的な活動や体験を行うことによって意欲的で前向きな姿勢となる。まずは、リアリティのあるクオリティの高い課題設定が欠かせない。一方、振り返りは、自分の学びを意味付けたり、価値付けたりして自覚し、他者と共有していくことにつながる。振り返りの場面には大きく三つの意味がある。①学習内容を確認する振り返り、②学習内容を現在や過去の学習内容と関係付けたり、一般化したりする振り返り、③自己変容を自覚する振り返りである。それぞれの機能を発揮するには、文字言語によって表現する学習活動などを行うことが考えられる。

対話的な学びについては、異なる人々との「学び合い」を重視することが大切になる。学習のプロセスを質的に高めていくとともに、他者と力を合わせた問題の解決や力を合わせて新たなアイデアを生み出すことが求められているからである。

対話的な学びを実現し、相互作用によって児童生徒の学びを豊かにするためには、次の三つに配慮したい。①児童生徒がどのような知識や情報を持っているか、②そうした知識や情報をどのように処理するか、③どのような成果物を期待しているか、である。これらに十分配慮し、相互作用によって豊かに「広がる」対話の場面を実現したい。

深い学びについては、「学習のプロセス」を意識することが大切である。学習のプロセスにおいては、それまでに学んだことや各教科等で身に付けた知識や技能を活用・発揮する学習場面に頻繁に生み出すことができるからである。深い学びの実現のためには、身に付けた知識や技能を活用したり、発揮したりして関連付けることが大切である。だからこそ、明確な課題意識をもった主体的な学びで知識や技能のつながりを生み、知識や技能を対話によってつなぐ学びが重要である。あるいは、学習活動を振り返り、体験したことと収集した情報や既存の知識とを関連させ、自分の考えとして整理し意味付けたり、それを自覚したり共有したりすることも大切になる。

# 本県の小・中学校のよさを生かし、更に充実・発展させるために

## 一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つのエッセンス～

検証改善委員会では、全国学力・学習状況調査のデータを基に、「安定した成果を示している学校」「課題の改善状況が顕著である学校」がもつ特長から、学力向上を支える関連因子を見付け、それらを「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校～5つのエッセンス～」としてまとめてきました。各学校において、この「5つのエッセンス」を、児童生徒の一層の学力向上に活用していただければ幸いです。

### 1 学校体制でPDCAサイクルの確立

効果のある取組を進めている学校では、教科や学年・校種を超えた、教員の共同研究が推進されています。質問紙では、「全国調査等の結果を分析し、教育指導の改善を行っている」「言語活動の実施状況等について、全教職員で話し合ったり、検討したりしている」などが全国の結果を大きく上回っており、本県が提唱する全国学力・学習状況調査、県学習状況調査、高校入試を一体と捉えた検証改善システムの充実が図られています。

### 2 子どもたちが安心して学習できる環境づくり

児童生徒質問紙では、「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦する」「自分にはよいところがある」などが全国の結果を大きく上回っています。これは子どもたちが前向きで真摯な姿勢であることはもちろんですが、児童生徒のよさや可能性を積極的に評価して、自己肯定感をもちたせようと工夫を凝らしている本県の教師・学校のきめ細かく温かな学習環境づくりが生み出した結果です。

### 3 子どもたちの思考を促し深める授業づくり

本県では、児童生徒が問題を発見し、話し合いなど他者との関わりを通して、主体的に問題を解決する探究型授業が盛んです。質問紙調査では「自分たちで課題を立てて、解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの活動に取り組んでいた」「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」などが高い数値を示しています。今後は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることが一層求められます。

### 4 自発的な学習を生み出すきめ細かな指導

子どもたちに確実に学力を身に付けさせるためには、自発的な学習を促す指導の工夫が大切です。児童生徒質問紙でも、「自分で計画を立てて学習する」「家で学校の授業の復習をする」などが全国の結果を大きく上回っています。今後更なる学力向上を期して、家庭学習の充実に向けた指導、補充的な学習や発展的な学習など個に応じた指導、自ら「問い」をもつことができる子どもの育成に向けた指導など、全校体制で組織的・継続的に取り組むことが求められます。

### 5 豊かな教育力を生む学校・家庭・地域の強い連携

学校・家庭・地域等のオール秋田でつくってきたすばらしい教育環境が、本県の教育の強みです。子どもたちの授業に向かう姿勢や家庭学習の取組の充実なども、それと深く関わっています。本県では、学校から家庭や地域への働き掛け・呼び掛けが特に丁寧になされており、学校・家庭・地域の強い連携を生み出しています。

## 学力向上に関する資料

美の国あきたネット (<http://www.pref.akita.lg.jp>) > 部署別 > 教育庁 > 義務教育課

・学校改善支援プラン ・秋田県学習状況調査 ・秋田わか杉 七つの「はぐくみ」 等

平成29年度  
秋田県検証改善委員会

## 委員一覧

※敬称略  
職名は平成30年3月現在

阿部 昇	秋田大学大学院教育学研究科教授	櫻庭 直美	義務教育課副主幹
田村 学	國學院大學人間開発学部教授	畑 朋幸	義務教育課主任指導主事
稲岡 寛	次世代型教育推進センター研修協力員	羽深 康之	総合教育センター主任指導主事
佐藤 有正	義務教育課長	亀沢 勉	総合教育センター指導主事
樋口 隆	総合教育センター副所長	山口 史人	北教育事務所鹿角出張所指導主事
伊藤 寛	能代市教育研究所長	中田 康広	北教育事務所鹿角出張所指導主事
伊藤 裕	秋田市教育研究所長	小澤 進	中央教育事務所指導主事
戸賀瀬晃久	由利本荘市教育研究所長	山口 晃正	南教育事務所仙北出張所指導主事
近野 良浩	湯沢市教育研究所長	大嶋 隆夫	義務教育課指導主事
織田羽衣子	由利本荘市立西目小学校長	竹村 竜祥	義務教育課指導主事
土倉 新也	由利本荘市立西目中学校長	小西 力	義務教育課指導主事
三浦 亨	義務教育課副主幹兼班長	長門 亮	義務教育課指導主事
上田 満	義務教育課副主幹兼班長	真崎 敦史	義務教育課指導主事